

第三回



上田市制施行80周年記念

うえだ

城下町映画祭

一日映協フィルムセレクション

平成11年12月4日(土)・5日(日)



第三回

うえだ 城下町映画祭

一日映協フィルムセレクション

プログラム

12月4日(土)

10:30	青春とはなんだ (上田ロケ作品)
12:20	オープニングセレモニー 大林宣彦監督講演 「映画づくりと街づくり」
13:35	青春デンドケデケデケ
15:55	カルメン故郷に帰る
17:30	カンゾー先生
19:40	終了予定

12月5日(日)

10:00	のど自慢
12:00	20世紀ノスタルジア
13:40	大阪物語
15:50	ポストマン・ブルース
17:50	座頭市と用心棒
19:46	終了予定

主催／「うえだ城下町映画祭」実行委員会（上田市・上田市教育委員会・信越放送）
・日本映画製作者協会

■後援／上田商工会議所・上田市塩田商工会・上田市川西商工会・上田観光コンベンション協会・上田青年会議所・上田地域広域連合・上田市文化芸術協会・信州地域デジタルアーカイブ研究会・上田市商店会連合会・長野県情報サービス振興協会東信支部・上田地域新映像産業推進協議会・上田市婦人会・上田市婦人団体連絡協議会・うえだ女性会議・東日本旅客鉄道（株）上田駅・しなの鉄道・上田交通・信濃毎日新聞社・信州民報・東信ジャーナル社・週刊上田新聞社・上田ケーブルビジョン

■協力／セム・コーポレーション

■協賛／上田高砂殿・(株)フジカーランド上田・信州ハム(株)・(株)新村・くるまやラーメン上田店・麒麟ビール(株)長野支店

■チケット／信越放送各放送局・上田市役所受付・上田市教育委員会文化課・市内プレイガイド・上田映劇・でんき館

お問い合わせ／信越放送上田放送局：TEL.0268-24-2141

チケット料金／2日券＝2,000円 1日券＝1,500円 前売券＝1,200円 大学生＝800円 高校生以下＝500円

ごあいさつ

「うえだ城下町映画祭実行委員会」 委員長・上田市長 平尾 哲男

本日は御来場いただき誠にありがとうございます。

この映画祭は、日本映画製作者協会の御協力を得て開催し、日本映画新旧の秀作を一堂に集め、また、上田をロケーション撮影した映画も併せて上映するものです。

上田は昔から映画撮影のロケーションの地として幾度となく選ばれ、地方都市としては珍しく非常に多くの映画に登場してきました。

このような地域資源を踏まえ、行政としては恐らく初めてのことと思いますが、より多くのロケーション撮影を呼び込むためのガイドブック、「YES UEDA～信州上田ロケ地ガイド」を本年発行し、関係事業所等に配付いたしました。その反響は予想以上に大きく、通常の3倍以上の映画・テレビの撮影が行われました。

特に今回お招きした大林宣彦監督は、本年2つの作品のロケーション撮影をこの地で行っていただきました。

今後このような活動が、上田市マルチメディア情報センター等を核とした、新たな映像産業の推進につながることも願っております。

今回の「映画祭」は市制施行80周年記念として、2日間で合計9本の映画上映と、1日目には大林宣彦監督の講演会があります。

この催しにより、多くの市民の皆様とともに映像文化を通じて、上田の地を再確認し新たなまちづくりにつながって行く機会となれば幸いです。

最後になりましたが、この「映画祭」の開催にあたり、御後援、御協賛いただきました企業・団体の皆様、そして、御協力いただきました大勢の市民の皆様に厚くお礼申し上げます。



幼少の頃、生家の納戸で「家庭用活動大写真機」を発見したのが映画との出会い。映写装置を創意工夫したり、8ミリ映画を作る少年期を過ごす。63年16ミリ処女作『喰べた人』がベルギー国際実験映画祭で審査員特別賞を受賞。66年『EMOTION=伝説の午後・いつか見たドラキュラ』を発表。当時のアンダーグラウンド・ムービーの嵐の中心となる。その頃からコマーシャル界の草創期に関わる。68年から約10年間はテレビCM(その数2,000以上)、PR映画の製作に情熱を燃やし、山口百恵、三浦友和のグリコ、上原謙、高峰三枝子の国鉄、チャールズ・ブロンソンのマンダム、ソフィア・ローレンのホンダなどヒットCM多数。PR映画は『手のひらのなかで乾杯／キリンビールのできるまで』など。

1977年に『HOUSE／ハウス』で劇場用商業映画の世界に進出。『転校生』(82年)、『時をかける少女』(83年)、『さびしんぼう』(85年)の尾道3部作は多くのファンに親しまれ、尾道を全国的に有名にすると共に、個人映画と商業映画との接点を見出す。その後『廃市』(83年)、『野ゆき山ゆき海べゆき』(86年)、『異人たちとの夏』(88年)、『北京的西瓜』(89年)、『青春デンデケデケデ』(『はるか、ノスタルジィ』(92年)『女ざかり』(94年)などの名作を次々に生み出し映画賞多数受賞。『ふたり』(91年)、『あした』(95年)に続く新・尾道3部作『あの、夏の日～とんでろ じいちゃん』(99年)が最新劇場映画。又、映画評論家淀川さんの一周忌(99年11月)に放映された作品『淀川長治物語・サイナラ』は今夏上田市内でロケされている。

大林 宣彦

Nobuhiko Obayashi

映画監督

1938年1月9日、広島県尾道市生まれ。

フィルモグラフィ (抄)

- 1944 『ボバイの宝島』 (8mm)
- 1945 『マヌケ先生』 (8mm)
- 1957 『青春・雲』 (8mm)
- 1958 『絵の中の少女』 (8mm)
- 1959 『だんだんこ』 (8mm)
- 『眠りの記憶』 (8mm)
- 1960 『木曜日』 (8mm)
- 『尾道』 (8mm)
- 1961 『中山道』 (8mm)
- 1962 『T氏の午後』 (8mm)
- 『形身』 (8mm)
- 1963 『喰べた人』 (共作・藤野一友) (8mm)
- 1964 『Complex=微熱の玻璃、あるいは悲しい
鯨舌ワルツに乗って、葬列の散歩道』 (16mm)
- 1966 『EMOTION=伝説の午後・いつか見たドラキュラ』 (16mm)
- 1968 『CONFÉSSION=遥かなるあこがれギロチン恋の旅』 (16mm)
- 1969 『てのひらのなかで乾杯／キリンビールのできるまで』 (16mm)
- 1970 『海の記憶=さびしんぼう・序』 (16mm)
- 1971 『オレレ・オララ』 (16mm)
- 『ジェルミ・イン・リオ』 (16mm)
- 1972 『スタンビート・カントリー』 (16mm)
- 『ハッピー・ダイナノサウルス・アルバム』 (16mm)
- 1977 『HOUSE／ハウス』
- 『瞳の中の訪問者』
- 1978 『ふりむけば愛』
- 『ピンク・レディー・コンサート』 (短編)
- 1979 『金田一耕助の冒険』
- 『新・木枯らし紋次郎』 (TV／オープニングタイトル)
- 1980 『人はそれをスキャンダルという』 (TV／第1話)
- 『いい旅チャレンジ20,000km』 (TV)
- 阿仁合戦『野の音』
- 清水港戦『旅の表情』
- 御殿場線『アメリカンバイ』
- 『さよならロッキーの仲間たち』 (日本版)
- 1981 『ねらわれた学園』
- 1982 『転校生』
- 『可愛い悪魔』 (TV映画)
- 1983 『時をかける少女』
- 『廃市』 (16mm)
- 『麗猫伝説』 (TV映画)
- 『恋人よわれに帰れ』 (TV映画)
- 1984 『少年ケニア』
- 『天国に一番近い島』
- 1985 『さびしんぼう』
- 『姉妹坂』
- 『多様な国土』 (70mm) (科学万博つくば'85)
- 1986 『彼のオートバイ、彼女の島』
- 『四月の魚 (ボウソングラブル)』
- 『野ゆき山ゆき海べゆき』
- 1987 『漂流教室』
- 『夢の花・大連幻視行』 (尾道大連友港博)
- 1988 『日本殉情伝・おかしなふたりものくるほしきひとびとの群』
- 『私の心はパパのもの』 (TV映画)
- 『異人たちとの夏』
- 『モモ・タローのかくれんぼ』 (瀬戸大橋博)
- 1989 『北京的西瓜』
- 1990 『彼女が結婚しない理由』 (TV映画)
- 『映画の肖像』 (黒沢明『夢』メイキングビデオ)
- 1991 『ふたり』 (TV&映画)
- 1992 『青春デンデケデケデ』
- 『はるか、ノスタルジィ』
- 1993 『水の旅人 侍KIDS』
- 1994 『女ざかり』
- 1995 『あした』
- 1996 『三毛猫ホームズの推理』 (TV映画)
- 1998 『風の歌が聴きたい』
- 『SADA』
- 『マヌケ先生』 (総監督作品／監督・内藤忠司) (TV映画)
- 『三毛猫ホームズの黄昏ホテル』 (TV映画)
- 1999 『あの、夏の日～とんでろ じいちゃん』
- 『淀川長治物語・サイナラ』 (TV映画)

青春とはなんだ

製作：日活 1965年 101分

■スタッフ

企画：水の江滝子
監督：舩田 利雄
脚本：山田 信夫
舩田 利雄
原作：石原慎太郎
撮影：横山 実
音楽：伊部 晴美

■キャスト

野々村健介：石原裕次郎
杉浦圭子：十朱 幸代
山角先生：高城 淳一
勝又教頭：須賀不二男
高松保夫：太田 博之



■解説

今年13回忌を迎え、今も多くのファンの心に生き続ける石原裕次郎。昭和38年に石原プロモーションを設立し、自ら映画制作に乗り出した第1作『太平洋ひとりぼっち』以後も、日活での主演は続いている。本作は彼の67本目に当たり、改築前の三小（現在は北小学校）のグラウンドを中心に上田市でロケーション撮影した作品である。上田公園や三小のグラウンドを真っ白なトレーニングウェアで疾走するあこがれの裕次郎を目撃した上田の映画ファンには忘れられない思い出になっているだろう。

この作品が製作された頃の裕次郎は、もはや青春を謳歌する若者ではなく社会や組織の中で生きる大人であり、数年後には、自社製作の『黒部の太陽』や『富士山頂』で自然を相手にした巨大なプロジェクトに命をかける男も演じていくようになる。

■物語

米国留学から帰国した野々村（石原）は、英語教師として田舎の高校に赴任した。健介が生きた英語を教えようとした青空の下での授業に、優等生たちは不満を持つ。一方、不良生徒のグループは意味もなく喧嘩沙汰に明け暮れる。同僚の教師杉浦（十朱幸代）は、野々村の熱意に好意を持ち忠告もしてくれるが、あからさまに彼を非難する教師も出始めた。他の教師とは異なる型破りな野々村は少しづつ生徒の信頼を得ながら、青春真っ只中の生徒たちに、ラグビーを通して若さを爆発させようとコーチを買って出る。

『青春とはなんだ』 上田ロケの思い出

上田市緑が丘 上原

上田市周辺は、戦後から現在まで数多くの日本映画のロケ地になってきた。裕ちゃんが主演した日活映画『青春とはなんだ』も、上田市とその周辺（小諸市・真田町・佐久市）でロケされている。私が初めて映画ロケを見学した懐かしい作品でもある。それは私が上田第三中学校に通っていた時のことだ。ある日の午後、授業を終え帰り支度をしていると校庭の隅の方に人垣ができていた。その尋常でない雰囲気思わず覗いてみると、そこには何と大スターの石原裕次郎が立っているではないか。後に新聞記事で知るのが『青春とはなんだ』という映画のロケだった。緑の山々に囲まれて、競技観覧用の石段のある三小の洋風木造校舎が、この映画の設定にピッタリだったのだろう。小学生の頃から映画ファンの家族に連れられ外国映画だけでなく東映時代劇から日活ニューアクションを観ていた私は、世代的には少し違うと思うが、裕次郎が大好きだった。間近で見る裕次郎は映画と同じように輝いていたし、とにかく足が長かった。私はそのままそこで薄暗くなりロケが終了するまで見学していた。初めて接する映画ロケと、憧れの大スター裕次郎が目の前にいる驚きと興奮に包まれながら…。その日撮影されていたのは学生とのラグビー・シーン。何度もリハーサルを繰り返してようやく本番撮影になる。一本の映画を作ることがこのように大変なものかと思ったものだ。別の日には吹奏楽部が石段で演奏するシーンが撮影され、我が校の生徒の何人かがエキストラで参加していたと思う。また、テレビでおなじみの太田博之、西尾三枝子、十朱幸代らも来ていた。今思えば写真を撮ったりサインをねだったりすれば良かったと思うのだが、純情な(?)中学生にはそこまで気がまわらなかった。やがて、映画は全国公開になり原町にあった上田中央劇場でも上映されたが、学校指定ではなかったので観ることができず悔しい思いをしたものだ。

あれから34年が経過した。私が通い、映画に撮影された校舎は建て直されて、今は上田北小学校の一部になっている。当時を偲ばせるのは校庭の石段と木々の緑だけだ。しかし、映画フィルムには当時の空気感や思い出が永遠に記録されている。この映画を裕次郎13回忌の節目の年に観られることを感謝したい。

そして、“映画に撮られた街”から“映画の街”をめざして「うえた城下町映画祭」がますます発展されることを願う。

青春デンドケデケデケ

製作：ギャラック・プレミアム=P・S・C=リパティフォックス 1992年 135分

■スタッフ

製作：川島 國良
大林 恭子
笹井 英男
監督：大林 宣彦
脚本：石森 史郎
原作：芦原すなお
撮影：荻原 憲治
岩松 茂

■キャスト

林 泰文
大森 嘉文
浅野 忠信
尾美としのり
佐野 史郎



■解説

直木賞に選ばれた芦原すなおのベストセラー小説を、故郷の尾道を舞台にした『転校生』『時をかける少女』『さびしんぼう』の大林宣彦監督が映画化した青春の佳作。今回は、原作と同じ香川県観音寺が舞台となっており、主人公たちが話す讃岐（さぬき）弁とあいまって、町の風景が非常にうまく描き出されている。

60年代、ロック・バンドを組んだ少年たちの友情が抒情的に描かれ、観る者の心を切なくさせる。主演の林泰文をはじめ、出演者は大林映画の常連たち。バンド仲間のひとりに『鮫肌男と桃尻娘』の浅野忠信がいるのも見逃せない。

■物語

時は、60年代。高校入試をひかえたある日、ラジオから聞こえてきたベンチャーズ「パイプライン」の爆発的なサウンド“デンドケデケデケ”で、雷に打たれたごとくロックに目覚めた藤原竹良（林泰文）は、高校に入ったらロック・バンドをつくろうと固く決意する。バンド仲間が集まったのは、才気煥発で要領がいいお寺の息子合田富士男（大森嘉文）をはじめ、個性的な少年たち（浅野忠信ら）。アルバイトで買った楽器で練習を始めるが、うるさい音のため、まわりの皆から迷惑がられてしまう。

カルメン故郷に帰る

製作：松竹=大船撮影所 1951年 86分

■スタッフ

総指揮：高村 潔
製作：月森仙之助
監督・脚本：木下 恵介
撮影：楠田 浩之
色彩技術：小松崎正枝
赤沢 定雄
音楽：木下 忠司

■キャスト

高峰 秀子
小林トシ子
井川 邦子
佐野 周二
坂本、武
笠 智衆



■解説

昨年12月に逝去した木下恵介監督による日本初の総天然色長編映画。国産の映画用カラーフィルムは1950年に初めてニュース映画に使用された。屋外のシーンのほとんどは本作品の舞台となった北軽井沢で実際にロケ撮影されている。当時は、まだ草津と軽井沢の間を軽便鉄道が走っていた。観光地としても一般化する前の北軽井沢の草原の緑と青い空、背景の浅間山がとてもきれいだ。ストリップパーが主人公でも過激な描写はなく、人情の機微を鮮やかな色彩で描く松竹ならではの作品といえる。

木下監督は43年『花咲く港』でデビューして以降、戦後の日本映画を黒沢明、今井正監督らとともにリードし、49本の作品を残している。本作のほか『二十四の瞳』『喜びも悲しみも幾年月』『野菊の如き君なりき』などがあり、庶民の等身大の生活感情をユーモアとペースで描くことが多かった。

■物語

浅間山を背景にしたある村の正さんに、家出して東京で自称「芸術家」になった娘、きん（高峰秀子）が友人のアケミを連れて帰ってくると手紙が届く。実はきんはストリップパーなのであった。村に到着した二人の派手さ、奇抜さに東京を知らない田舎の人間は驚くばかり。ある日、村の小学校では運動会が開かれ、そこで観客を前に地元の音楽家が自作の曲を発表するが、その最中に「舞台衣装」をアケミが落としてしまう。二人は汚名挽回に凱旋公演を思いつくがさらに騒動を引き起こすことに…。

カンゾー先生

製作：今村プロダクション＝東映＝東北新社＝角川書店
1998年 129分

■スタッフ

製作：飯野 久
松田 康史
監督：今村 昌平
脚本：今村 昌平
天願 大介
原作：坂口 安吾
音楽：山下 洋輔
撮影：小松原 茂

■キャスト

柄本 明
麻生久美子
ジャック・ガンブラン
松坂 慶子
世良 公則



■解 説

『樗山節考』（'83）、『うなぎ』（'97）で2度のカンヌ国際映画祭グランプリ（パルム・ドール賞）に輝き、映画製作に情熱をかたむけ続ける名匠・今村昌平監督の18本目の作品である。本年度のカンヌ国際映画祭での特別招待作品にも選ばれた。今村監督は開業医の家に生まれており、主人公には監督の父親のイメージが反映されている。原作は坂口安吾の『肝臓先生』。世界的ピアニストの山下洋輔がジャズ音楽で映画で描かれる暗い時代に生きる人々の姿を盛り上げる。撮影は瀬戸内海に面した岡山県邑久郡牛窓町などで行われ、スタッフとキャストが合宿し、町の全面協力のもとに4ヶ月間に及ぶ長期ロケを敢行した。

■物 語

時は昭和20年、敗戦直前の夏である。「医は仁術なり」を信条とする医師、赤城風雨（柄本明）は、町の人達から「カンゾー先生」と呼ばれている。赤城にかかると誰もが「肝臓病」にされてしまうからだ。赤城は肝臓炎の病原体さえ発見できれば苦しんでいる人達を救えるという執念を持っていて、そのため、顕微鏡づくりに熱中していた。その赤城の許に幼い弟妹を養うため、時々「売春」まがいの事をしているソノ子（麻生久美子）という娘が来るようになった…。

のど自慢

製作：シネカノン 1998年 112分

■スタッフ

製作：李 鳳宇
石原 仁美
根岸 洋之
監督：井筒 和幸
脚本：安倍 照男
井筒 和幸
撮影：浜田 毅

■キャスト

室井 滋
大友 康平
伊藤 歩
北村 和夫
竹中 直人
小林 稔侍



■解 説

監督は、出世作『ガキ帝国』（'81）で、80年代の初めに森田芳光・根岸吉太郎・石井聰互らとともに、当時の若者達の支持を得た井筒和幸。小気味良い会話と軽妙なカメラワークで見せた傑作『岸和田少年愚連隊』（'96）と比較しても遜色のない作品に仕上がっている。人気番組「のど自慢」の本番出場に挑む人々の人生模様を、笑いの中にも感動を盛り込んで見せるハート・ウォーミングな映画で、主演は室井滋と“HOUND DOG”の大友康平。脇役の竹中直人や小林稔侍は相変わらず上手い。

■物 語

NHKの長寿人気番組「のど自慢」が、関東のある地方都市にやってくることになり、街は一寸した興奮状態。出場して合格の鐘を鳴らしたい人々は、はやりたつが、約4,000通の応募者の中で、本番に出られるのはたった20組という超難関。この街の出身で一向に芽の出ないドサまわりの演歌歌手（室井滋）、不連続きの失業者で、焼鳥屋になるべく修行中の中年男（大友康平）、恋人と家を飛び出した姉を応援したい女子高生（伊藤歩）、可愛がっていた孫と別れることになった老人（北村和夫）らが、それぞれの人生の転機を求め、生きる希望を求めて本番出場にチャレンジする。

20世紀ノスタルジア

製作：オフィス・シロウズ 1997年 93分

■スタッフ

製作：西村 隆
佐藤美由紀
監督：原 将人
脚本：中島 吾郎
原 将人
撮影：馬場 順一

■キャスト

広末 涼子
圓島 努
多田亜沙美
余 貴美子
根岸吉太郎



■解説

弱冠18歳で撮った16ミリ映画『おかしさに彩られた悲しみのバラード』で一躍“時代の寵児の誕生”と話題を呼んだ原将人監督の劇映画デビュー作品であると同時に、今や人気絶頂のアイドル広末涼子の記念すべき映画デビュー作でもある。彼女は、まだ無名だった95年のオーディション時に、500名の中から見出された。映像的にも非常にユニークで、ビデオ映像が多用作れ（広末自身が撮影した映像が含まれている）、広末が歌うミュージカル・シーンが挿入されているのも大きな話題となった。また、映画監督の根岸吉太郎が父親役で出演している。

■物語

高校生の遠山杏（広末涼子）は、夏休みに片岡徹（圓島努）と一緒に撮影したビデオを、一本の映画として完成させるため、学校の編集室でひとり編集作業をしていた。徹が膨大なビデオを残し、突然オーストラリアへ旅立ってしまったのだ。二人が出会ったのは、ある橋の上。宇宙人チュンセにボディジャックされたという徹から、自分の身体から分裂しかかっている宇宙人ポウセのために身体を貸してほしいと頼まれた杏。滅びゆく地球をレポートしているのだという徹に、杏は戸惑いながらも次第に心惹かれていく。

大阪物語

製作：吉本興業＝関西テレビ放送＝電通＝近代映画協会＝エス・エス・エム 1999年 119分

■スタッフ

製作：泉 正隆
中澤 隆司
勝田 祥三
監督：市川 準
脚本：犬童 一心
撮影：小林達比古
薦井 孝洋

■キャスト

池脇 千鶴
沢田 研二
田中 裕子
南野 公助
ミヤコ蝶々



■解説

住宅メーカーのCMで一躍有名になった池脇千鶴の映画デビュー作。両親の離婚や父親の失踪にもめげず、健気に成長してゆく多感な少女役を好演している。両親の夫婦漫才師には、沢田研二と田中裕子。『男はつらいよ・花も嵐も寅次郎』、『カボネ大いに泣く』以来三度目の共演となるが、結婚してからは初めての共演となる。監督は、『東京夜曲』（'97）でモントリオール国際映画祭監督賞を受賞した市川準。市井の人々の生活を描かせたら、この人。現代の小津安二郎が。『東京兄妹』（'94）もそうだったが、小津を意識しての「東京～」なのだろうか、今回も、名作『東京物語』に対しての『大阪物語』なのだろうか。

■物語

夫婦漫才師“はる美&りゅう介”を両親に持つ霜月若菜（池脇千鶴）は、中学2年生。弟と一緒に、両親の真似をしては、近所の人を喜ばせていた。ところがある日、隆介（沢田研二）が、年下の女性・妙子を妊娠させてしまう。これには春美（田中裕子）も激怒、二人は離婚してしまう。妙子と結婚した隆介だったが、再び浮気がばれ、妙子は家を飛び出す。ショックを受け、酒に溺れるようになった隆介は消息を絶ってしまう。

ポストマン・ブルース

製作：F・T・B=S duplex Inc.=テレビ東京=日活 1997年 110分

■スタッフ

製作：津滝 嘉夫
大崎 正人
石川 博
山口 友三
原案・監督・脚本：サブ
撮影：栗山 修司
音楽：岡本 大介

■キャスト

堤 真一
遠山景織子
大杉 漣
堀部 圭亮
田口トモロヲ



■解 説

ヨコハマ映画祭新人監督賞を受賞し、ベルリン国際映画祭でも絶賛を浴びたデビュー作『弾丸ランナー』（'96）にひきつづき監督サブが放つノンストップ・ムービー第2弾。とにかくスゴい映画なのである。スピード感あふれる自転車の疾走シーン、意表を衝くストーリーと笑い。知らないうちに指名手配されてしまう郵便配達員、おしゃべりな殺し屋、高倉健を愛するヤクザなど登場人物のキャラクターは絶品だ。観終わったら、誰彼かまわず勧めたくなること間違いなしの一本。ともかくこの“時速60キロのラブ・ストーリー”に笑い、そして泣け！

■物 語

沢木龍一（堤真一）は、どこにでもいそうな郵便配達員。偶然訪ねた家で再会したのは、今はヤクザとなってしまった高校時代の同級生野口修二（堀部圭亮）だった。麻薬に手を出した野口を張り込んでいた刑事は、沢木を麻薬の“運び屋”と勘違いし、尾行を開始する。そうとは知らない沢木は、がんで余命いくばくもない小夜子（遠山景織子）と出会い、同時に殺し屋ジョー（大杉漣）とも知り合いになる。この殺し屋との接触が警察をなおいっそう勘違いさせ、沢木は凶悪犯人に仕立て上げられてしまう。

座頭市と用心棒

製作：勝プロダクション 1970年 116分

■スタッフ

製作：勝 新太郎
監督：岡本 喜八
脚本：岡本 喜八
吉田 哲郎
原作：子母沢 寛
撮影：宮川 一夫
音楽：伊福部 昭

■キャスト

座頭市：勝新太郎
用心棒（佐々木大作）：三船敏郎
小仏の政五郎：米倉斉加年
九頭竜：岸田森
脇屋陣三郎：神山繁
後藤三右衛門：細川俊之
兵六爺さん：嵐寛寿郎
烏帽子屋弥助：滝沢修
梅乃：若尾文子



■解 説

勝新太郎は、昭和35年の『不知火検校』で演じたアンチヒーローで注目され、『悪名』や『兵隊やくざ』などのシリーズで演じた豪放なキャラクターが人気を得た。また『座頭市』は海外でも評判になり、香港からジミー・ウォングを招き『新座頭市・破れ!唐人剣』を製作。また、当時、日本ではまったく無名だったブルース・リーから俳優派遣の依頼を受けて、『ドラゴン怒りの鉄拳』に橋本力、勝村淳が出演したという。

本作品は、石原裕次郎や三船敏郎らと同様、自ら映画製作に乗り出していた勝新太郎が、座頭市と用心棒という夢の対決を実現させた話題の作品である。監督は東宝でのアクション作品に定評があり、座頭市シリーズ初演出の岡本喜八、撮影は『悪名』シリーズや三船敏郎の『用心棒』の名カメラマン宮川一夫、音楽は『ゴジラ』ほか多くの作品がある伊福部昭でスタッフも夢の顔合わせである。

■物 語

座頭市（勝新太郎）は、人を切ることに嫌気がさし、記憶の彼方にある梅の香りがする村を再び訪れることにした。かつて座頭市の手を引いてくれた女（若尾文子）の手ぬぐいも変わっていないが、当時の名主（嵐寛寿郎）は、村外れの小屋で石仏を彫る一介の老人になり、なにかいわくがありそうな商人（滝沢修）が村を支配していた。そればかりか、やくざ者がはびこり、正体不明の浪人（三船敏郎）が飲んだくれていて、かつての面影はなかった。平穏を求めた座頭市に浪人はなぜか挑発的な態度をとる。

“人間と地球のより良い調和をパッケージから”

自然環境との共生を目指す新村は、食品資材、食品関連資材、

産業資材・設備、農業資材など幅広い分野での

包装関連資材とサービスを提供するパッケージングの総合商社です。

「包む」ことのあらゆるニーズに応えることが、パッケージの専門家としての私たちの使命です。

常に環境と共存した新しいもの、便利なものを求める時代において、全ての要望に、

独自のノウハウを使ってお応えしていきます。

素材開発からリサイクルシステムまでトータルに提案し、

魅力ある商品づくりをお手伝いしています。



株式会社 **新村**



■本社／〒386-8551 長野県上田市秋和199-4 TEL.0268-22-6279(代) FAX.0268-27-0559

■上田支店 ■松本支店 ■長岡支店 ■長野支店 ■関東営業所 ■真田工場 ■関東工場

くまのラーメン 2000年ドリーム宝くじ

食べて、遊んで、楽しい2000年を!

ただいま実施中! 12/19(日)まで

期間中お食事(500円以上)された方に抽選でビッグなプレゼント!

2000年は
食べまくり!

1等

東京 **ペアで**
ディズニーランド
パスポート券

2等

手づくり
餃子券

100皿分

2000年末まで有効です。

3等

手づくり
**餃子(1皿)
無料券**

くまのラーメン 上田店

上田市踏入2-1223 ☎ 0268-25-6366

★詳しくは店内ポスターにて



1000年に一度のプレミアム
**ブライダル
キャンペーン開催中!!**

The Millennium Bridal Campaign

期間 / 1999年10月1日～2000年1月31日

2000年7月末までに挙式・披露宴を
なされるカップルに!!

もれなく
Present 1

5万円分のパーティーチケットをプレゼント!

もれなく
Present 2

オリジナルブルーガータープレゼント!

抽選で5組の方に 4泊6日
ハネムーン!!

**ハワイ旅行を
プレゼント!!**

※出発日は限定させていただきます。



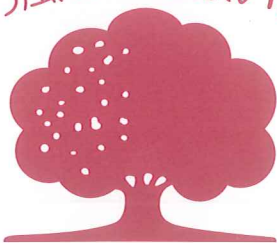
TAKASAGODEN

上田高砂殿

上田市天神 2-2-2
TEL 0268-23-1133

信州ハムは健康家族を応援します。

自然の風味で健康いきいき。

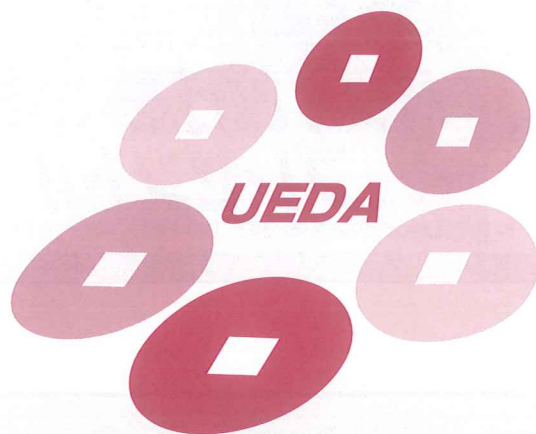


グリーンマーク®

グリーンマークは信州ハムの無添加製品のシンボルマークです。

信州ハム

上田市下塩尻950 TEL.0268-22-8686 (代)



上田市制施行80周年記念